

# 国 語

(解答番号  ～ )

※国語は「経済経営学部」および「人文学部」は必須。  
「健康医療学部」および「バイオ環境学部」は選択。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「100分de名著」という教養番組のプロデューサーになつて、今年で十一年目を迎えた。読者の中にはご存知の方もおられるかもしれないが、NHK・Eテレで毎週月曜日、夜十時二十五分から放送中の、古今東西の名著を一〇〇分という時間を使ってわかりやすく解説していく番組だ。「難解な名著のあらすじをダイジェストにして、お粥<sup>か</sup>みたいに食べやすく加工して伝えるお手軽教養番組だ」と揶揄<sup>やゆ</sup>されたり、中には「こんな番組けしからん。名著そのものを読まないでどうする？」などとお叱りを受けたりすることも当初はかなりあつた。だが、一度二覧<sup>り</sup>になつた人たちから「意外に深いぞ」とか「毎回新鮮な発見があつて驚く」といった感想も出てきはじめていて、長年苦勞して続けてきた甲斐<sup>かひ</sup>があつたぞ……などと、ぬか喜びをさせていただいている。

番組がマスコミに取り上げられる機会も増え、記者や雑誌編集者の人たちからは「どんなふう  
に本を選んでいるのか」「講師を選ぶ基準は？」といった、毎度（ i ） ような質問が飛び出してくるのだが、選書や講師選びの方法論を明確に言語化できているわけでもなく、その場  
であたふたして、ごくごく最近の例を引き合いに出しながら、（ ii ） 言葉を探すはめに  
なる。情けないこと、この上ない。

一度だけ、「どうしてそんな質問ばかりするんですか」と、ややキレ気味に問い返したことがある。取材者<sup>A</sup>も当惑したに違いない。だが、正直、これらの質問にはうんざりだつたのだ。その  
ときの質問者の意外そうな顔が今でも忘れられない。

「だって、毎回取り上げられる名著も講師も、どう考えたつて、今、この瞬間、この時代にぴつ  
たりのものを選んでいきますよね。何かコツがあるんじゃないかと思つて……」

そのとき思つた。どうやら、名著や講師を選んでいるのは、自分じゃなかつたのだ。コツなん  
てないもの。だから驚かれても困るのだ。説明なんてできない。選んでいる瞬間、おそらく私の  
心と体は、何者かにのつとられて、選ばされているのだ……そう考えると、腑<sup>B</sup>に落ちるものが  
あつた。そう、私は選ばされている……。

冗談めかして書いてみたが、（ iii ） 嘘<sup>うそ</sup>ではない。私に名著を選ばせているのは、「ヘル  
メス」という神様なのだ。そんなことに、思い至つた。

今を遡ること、ちょうど四十年前、岩波書店から一冊の季刊誌が創刊された。『くるめす』と

いう、一風変わった名前の雑誌。私が大学一年生の頃のことだった。今でもよく覚えている。大学生協の書籍コーナーに平積みされていた、まばゆいばかりに輝く表紙。黒田征太郎が描いた鮮やかなオレンジ色の鳥が私の心をわしづかみにする。

なんだ、この雑誌は。

編集同人として名を連ねているのは、磯崎新、大江健三郎、大岡信、武満徹、中村雄二郎、山口昌男……当時、哲学の学徒だった私が、それぞれの分野で大きな刺激をうけてやまなかつた知の巨人たち。目次のラインナップの豪華さにも目が（ iv ）。「なんとということだ！ 気づいたら、その雑誌をひつつかんで、レジでなければなしの小遣いをはたいて買っていた。

そのままの勢いで学生食堂に飛び込み、カレーをはおぼりながら貪り読む。おかげで、表紙がカレーで少し汚れる。巻頭言から釘付けだ。

「いま知の地殻変動のなかで、新しい文化の胎動を呼びおこすべく、われわれが季刊誌をつくらうとして想起するのは、林達夫の言葉です。

《歴史家というものは、……常に臨機応変、時代・時間を逆行したり、<sup>II</sup>横すべりしたりして、自在にとび廻っている人間のことである。……もし古風に「精神史」の守護神を求めるならば、（中略）冥界、地上界、天上界の使者<sup>メッセンジャー</sup>＝神ヘルメスであろう。》

われわれはすでに永く、お互いを自由に結びつける談論をかさねてきました。（中略）われわれは確かに臨機応変、時代・時間を逆行したり、横すべりしたり、自在にとび廻ることをめざしたのですし、その姿勢の肝要さを疑わぬのが、共通の諒解<sup>りようかい</sup>でもありました。」（季刊誌『くるめす』創刊号「創刊にあたって」より）

待っていた！

……そう思った。こんな知の饗宴<sup>ちやうえん</sup>を。

<sup>C</sup>片言隻句<sup>ひげんせつこ</sup>をあげつらうような旧態依然とした大学の講義に倦み疲れていた私は、<sup>III</sup>一陣の涼風を

全身に浴びるように、『へるめす』の中の言葉を追っていった。磯崎新、山口昌男、大江健三郎、大岡信、ミヒヤエル・エンデ、上野千鶴子、そして締めくくりの中村雄二郎……どの著者も、この林達夫の言葉をまるごと体現するような、ぞくぞくする「横すべり」を実践していた。

今にして思えば、私の知の冒険は、この一冊から始まったといつてよい。<sup>D</sup>タコソボ的に専門性を追い求めるのではなく、あらゆる領域に横すべりして、多様な知の果実を貪り食らう。それを自らの胃袋の中で異種混交させ、今までにない発想を生み出す……そんな流儀をこの雑誌から学んだ。<sup>IV</sup>おそらく内容は一割も理解していなかったと思う。だが、そのめくるめく知の世界に私は酔いしれた。

はっと我にかえる。その創刊号が今、私の手の中にあるのだ。この稿を起こすにあたり、再読していたのだった。

あの頃のコウフンの手触りを、再読しながらもう一度確かめ直す。偶然に身をまかせながら、気持ちのおもむくままに多彩な知の領域を渡り歩き、つまみ食いをしては、全く異なる分野の知と結び付け、響き合わせ、次の瞬間には、全く別の時空へと移動する。……私が番組の企画制作の場でやっているのは、これじゃないか。私が名著探し、講師探して実践しているのも、こんな風な「横すべり」なのだ。今、読むべき名著には、こうしたプロセスを縫なければ決して出会えない。ヘルメスに導かれて私は本を選んでいる。私の名著選びが、わずかにでも人々の心を動かしているとしたら、それは、このときに私の魂に宿った「ヘルメス神」のおかげといつても過言ではない。

もう一つ大事なところに触れておこう。私は、この『へるめす』を通して、大江健三郎という作家に出会い直した。今は岩波文庫に入っている名作『M/Tと森のフシギの物語』もこの雑誌に連載されていて毎号楽しみにしていたものだ。たびたび掲載される彼の新しい小説や刺激的な座談会に触れるにつけ、デビュー作以来、ほとんど手にとることを忘れていたこの作家の小説を再び本格的に読もうと思ったのだ。『へるめす』発刊の少し前に発刊された小説『新しい人よ眼ざめよ』をまず手にとった。その圧倒的な読後感が今も忘れられない。小説なのに、どうしてウィリアム・ブレイクという詩人の詩をここまで深く読み解く描写が続くのか、意味がわからない。だが、どうやら、その読解は、この小説の筋を時折、ひらめくように照らし出している。

この横断的なつながりは何だろう。内容の半分も理解はできなかったが、私は、大江が障害のある息子をモデルにして造形した「イーヨー」という途方もない存在とブレイクの詩の断片を、意味がわからないまま、まるごと飲み込んだ。それは消化されない石ころのように、私の腹の中でころころとタイリユウし続けた。

やがて飲み込んだ異物が発芽する瞬間がやってくる。三十代後半、私は、いまだかつてないほどのザセツを味わっていた。「NHKスペシャル」という番組で「胎内被爆」についての取材を担当することになったのだが、被爆者の人たちへの取材が、怖くてできなくなってしまったのである。上司からは、ダメなディレクターという（ V ）を押され、同僚からも軽蔑され、それでもなんとか取材にこころがいていた。だが、この被爆者の人たちを番組で紹介してしまうと、彼らは差別の視線にさらされてしまうのではないか。そう思うと一歩も前へと進めなくなっていた。取材が怖くてしかたがない自分自身を、「ダメ人間」……と自ら罵った。

「イーヨー」の声が聞こえてきた。

「足、大丈夫か？ 善い足、善い足！ 足、大丈夫か？」

それは、厳しい状況に置かれているわが身も顧みず、父親のことを深く心配し、思いやる無垢な言葉。ゆるやかに曲がった「イーヨー」の右手が父親の病んだ片足を撫でさする。父親の方は、思春期に至った「イーヨー」のペンボウぶりに対して、疑惑と不信の眼すらもついていたというのに。父子のぎくしゃくした関係がほどけていく瞬間だった。

そう、それは弱々しかったが、はっきりとした声だった。怖くて取材ができない弱い心を否定する必要があるのか。人を傷つけないと思う気持ちをどうして押し殺す必要があるのか。私の中にも、「イーヨー」が確かに存在している。自分のことは置いて、相手のことを何よりも思いやる無垢な魂……そんな自分の中の「イーヨー」を、私は自らの手で圧殺しようとしていた。

再読。涙が止まらなかった。私は、自分の中の「イーヨー」を生かす。誰が軽蔑してもいいではないか。自分の中の「イーヨー」を中核にすえて仕事をしよう。そう決意できたとき、再び前を向いて歩けるようになっていた。

自らが執筆しつつある小説と、自らが生きる現実と、そして、自らが深く読み解こうとしているブレイクの詩と……大江健三郎作品の中で、それぞれがヘルメスの神に導かれるがごとく、越境し、混ざり合い、強韌な布が織られていく。大江作品を読むことを通して、私の人生もその中

に織り合わされていく。そのプロセスが、私に生きる力を再び与えてくれたのだ。

私が今、プロデューサーとして心がけている作法や流儀の中には、大江健三郎の思想や『へるめす』の知が確かに生きている。それは、ある瞬間、わが皮膚をつき破り、期せずして噴き出し始める。その力に巻かれていくように、面白い出来事が続々と起こっていく。計算外に、選んだ名著が時代とびつたりフゴウしてしまうのはそんなときだ。

異種混交の中で生み出される新たな知と自らの肉が確かな形で結び合い、そして、そのことが人生や仕事をも変えていく。そんな奇跡を引き起こす、わが魂の中の「ヘルメス神」をしつかりと抱きしめながら、「100分de名著」という番組の可能性を、これからも豊かに押し広げていきたい。

(出典：秋満吉彦「ヘルメスが導く名著選び」(「図書2024年2月号」所収) 岩波書店)

問一 文中の傍線部 a ～ e に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、 ～ 。

- a コウフン
- 
- ① 大いにフンガイした
  - ② 議論がフンキユウする
  - ③ 孤軍フントウ
  - ④ フンカを繰り返す火山
  - ⑤ フンコツ碎身

- b タイリユウ
- 
- ① エンタイ料金を払った
  - ② タイギ名分
  - ③ タイシン設計の家
  - ④ 食欲ゲンタイ
  - ⑤ 安全チタイにとどまる

c ザセツ  
3

- ① セツパクした状況
- ② 予防セツシユを受ける
- ③ セツジヨクを果たす
- ④ 費用をセツパンする
- ⑤ ホウセツされた概念

d ヘンボウ  
4

- ① ボウリヤクをめぐらす
- ② 事件のゼンボウ
- ③ ボウトウの挨拶
- ④ ボウリをむさぼる
- ⑤ ビボウ録

e フゴウ  
5

- ① 地方にフニンする
- ② 多額のフサイを抱える
- ③ フヨウ家族がいる
- ④ 三位にフジヨウする
- ⑤ カンタンフをつける

問二 傍線部 A ～ E の語の文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、6 ～ 10。

A 当惑  
6

- ① ひどく腹を立てること
- ② 失礼を反省して詫<sup>わ</sup>びる気持ち
- ③ 自分の気持ちを曲げて相手の意向に合わせること
- ④ どう対処したらよいかわからず困ること
- ⑤ 言い当てられて同意すること

B 腑に落ちる  
7

- ① 思いつく
- ② がっかりする
- ③ 思い出す
- ④ 深い思索が始まる
- ⑤ 納得がいく

C 片言隻句

8

- ① ちよつとした言い間違い
- ② ほんのわずかな言葉
- ③ かたよつた考え
- ④ 故事や伝統的な慣習
- ⑤ ごまかしや言い訳

D タニツポ的

9

- ① 対象が狭いこと
- ② 出口が見つからないこと
- ③ 横並びであること
- ④ 孤立していること
- ⑤ 旧式であること

E 透方もない

10

- ① 所在ない
- ② いわれのない
- ③ とんでもない
- ④ 変哲もない
- ⑤ はかない

問三 空欄 ( i ) ( v ) に入る最も適当な語を、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、( i ) が 11、( ii ) が 12、( iii ) が 13、( iv ) が 14、( v ) が 15。

11

( i )

- ① 度肝を抜く
- ② 身も蓋もない
- ③ 奇をてらつた
- ④ 判で押した
- ⑤ 竹を割つた

12

( ii )

- ① 鼻にかけた    ② 二の句が継げない    ③ 場当たりのな    ④ 血も涙もない  
⑤ 手垢てあかのついた

13

( iii )

- ① ましてや    ② あたかも    ③ もしくは    ④ あながち    ⑤ すこぶる

14

( iv )

- ① まわった    ② くらんだ    ③ つぶれた    ④ なかった    ⑤ かすんだ

15

( v )

- ① 太鼓判    ② 横車    ③ 背中    ④ 念    ⑤ 烙印ろういん

問四 傍線部Ⅰ「名著や講師を選んでいるのは、自分じゃなかった」について、本文全体を読んだ上で、真意と考えられる最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、**16**。

- ① 長年苦勞して続けてきたおかげで明確に言語化できない選出のコツをつかんでいたことを、自覚していなかった。
- ② この仕事を始める前の古い経験に影響を受けて培われた選出の方法が、自分にあることを自覚していなかった。
- ③ 異種混交による奇跡の選出は、自分自身ではコントロールできないものであることを自覚していなかった。
- ④ 選出の方法論を明確に言語化できないのは、影響を受けた古い経験を忘れていたからだと自覚していなかった。
- ⑤ 実際に選出しているのは、『へるめす』に名を連ねる偉大な知の巨人たちだったということに自覚していなかった。

問五 傍線部Ⅱ「横すべり」をはじめ、この文章の中で繰り返し使用される「横すべり」について、本文筆者の解釈の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は、17。

- ① ある領域について正統とされるものだけでなく、異端や俗説とされるものにも目を向け取り入れること
- ② 特定の知の領域について、想定していたのとは違う方向に思考が深まっていくこと
- ③ 世間から期待される領域ではなく、いわば役に立ちそうもないものを積極的に見出していくこと
- ④ ある特定の知の領域にとどまるのではなく、様々な領域に目を向け関連付けて考えること
- ⑤ 時間の経過による変化にはこだわらず、空間の広がりといった横の方向を重視すること

問六 傍線部Ⅲ「一陣の涼風を全身に浴びるように」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、18。

- ① 潜在的に求めていた心地よい知の刺激を存分に感じて
- ② 突如勢いよくやってきた知の洪水に追い立てられるように
- ③ 大学の講義にはない強烈な知の刺激に恐れおののいて
- ④ これまで慣れ親しんできた知の世界を気持ちよく楽しんで
- ⑤ 大学一年生の自分には不相応なレベルの高い知に面食らつて

問七 傍線部Ⅳ「おそらく内容は一割も理解していなかったと思う。だが、そのめくるめく知の世界に私は酔いしれた」をはじめ、大学生当時の自己を振り返る表現から、大学生の自分に対する、筆者の現在の心境としてどのようなことがうかがえますか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、19。

- ① 若い頃の無知を恥じながらも、知に対して一生懸命だった自分をほほえましく懐かしんで

いる。

- ② 大人になった自分から見ると若さゆえの稚拙さに目がいくが、実際には若い感性でしか理解できなかったことがあったと自負している。
- ③ 若いなりに内容を理解して感銘を受けたことをすっかり忘れ、他人を見るような感覚で批判している。
- ④ 若かった自分を謙虚に思い返しながらも、今日の仕事の軸になるものをつかりと見出し、ていたと感じ再評価している。
- ⑤ 若さゆえの一心不乱さや知ったかぶりの様子を思い返し、妄信的な態度に恥ずかしさを感じている。

問八 傍線部V「飲み込んだ異物が発芽する」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

20
----

。

- ① 理解されないまま筆者の中にあつたものが、つらい状況に陥った筆者に再読を促したという事
- ② 初めて読んだ時にはほとんど理解できなかった「イーヨー」の心が、つらい状況に陥った時によりやく理解でき始めたということ
- ③ 理解できないまま筆者の中にあつたものが、胎内被爆者への過度な配慮や恐怖心という形で顕在化してきたということ
- ④ 初めて読んだ時にはほとんど理解できなかったが、ようやく大江健三郎の意図したものが作用し始めたということ
- ⑤ 理解しないまま筆者の中にあつたものが、つらい状況に即してよみがえり、糧となって役立ち始めたということ

(次頁に続きます)

問九 傍線部Ⅵ「自分の中の『イーヨー』を中核にすえて仕事をしよう」の説明として最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

21
----

。

- ① 人を傷つけないという気持ちや、怖くて取材ができないという気持ちを中心に考えると仕事が進まなくなってしまうが、軽蔑されても気にせず、「イーヨー」の声を聞くために再読を繰り返そうということ
- ② 他者を思いやるあまり自身の仕事が進まなくなり軽蔑されたとしても、思いやる心を否定してしまふのではなく、むしろその気持ちを大切に考えて仕事を前に進める道を模索しようということ
- ③ 人を傷つけないという気持ちや、怖くて取材ができないという気持ちを大切に考えると仕事が進まなくなつて軽蔑されてしまうので、「イーヨー」のことだけを中心に考えて仕事を前に進める道を模索しようということ
- ④ 他者を思いやることで、自身の仕事が進まなくなり軽蔑されても気にする必要はないが、どうにかして仕事は進めなければならないので、むしろ思いやる気持ちを強く持つて恐怖心に打ち勝つていこうということ
- ⑤ 他者への過度な思いやりや、人を傷つけてしまうことへの恐怖心に打ち勝つために、常に「イーヨー」ならどう考えるかを念頭において仕事を前に進めていけば、軽蔑されることもないだろうということ

問十 傍線部Ⅶ「私の人生もその中に織り合わされていく」の説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

22
----

。

- ① 筆者が現在書き進めている小説と、プロデューサーを担当している番組、そして初めて読んだ時にはほとんど理解できなかったウィリアム・ブレイクの詩の読解を、大江健三郎の小説を再読することで異種混交につなぎ合わせ、仕事で良い結果を出すということ
- ② 大江健三郎の小説と、大学生のころに傾倒した『へるめす』、そして筆者の中に息づいてゐるイーヨーをつないで混ぜ合わせた小説を書き進めており、その小説が筆者の仕事である

プロデューサー業にも深く影響を与えているということ

- ③ 大江健三郎が、障害を持つ自分の息子をモデルに造形したイーヨーと、ウィリアム・ブレイクの詩の読解を横断的につないで混ぜ合わせて小説を書き、その小説が筆者の人生にも大きな影響力を持って生き続け、筆者の仕事の中にも生かされていくということ
- ④ 大江健三郎が造形したイーヨーと、小説の中に展開されるウィリアム・ブレイクの詩の読解を横すべりにつなぎ合わせることで筆者自身の実体験の一部とし、小説中の登場人物の一人になった気持ちで思いやりをもつて仕事を進めていくということ
- ⑤ 大江健三郎が、自分の息子をモデルにしてイーヨーを造形したように、筆者も自分が生きる現実をプロデューサー業の中に横断的に生かして番組作りをしていけば、その番組が多くの視聴者の人生に大きな影響力を持つ強靱な布になれるということ

問十一 次の①～⑤を、筆者に起こった順番(1)～(5)に並べなさい。解答番号は、(1)

が 、(2)が 、(3)が 、(4)が 、(5)が 。(完全解答)

- ① 『くるめす』創刊号を初めて読む
- ② 『くるめす』創刊号を再読する
- ③ 『新しい人よ眼さめよ』を初めて読む
- ④ 『新しい人よ眼さめよ』を再読する
- ⑤ 大江健三郎のデビュー作を初めて読む

(1) → (2) → (3) → (4) → (5)

(次頁に続きます)

二

次の問一～問三に答えなさい。

問一 次のA～Eの語について、A～Cは対義語、D・Eは類義語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は28～32。

(対義語)

28

A 繁栄

- ① 退化      ② 消滅      ③ 没落      ④ 下降      ⑤ 衰弱

29

B 末端

- ① 奥義      ② 起点      ③ 先端      ④ 本質      ⑤ 中枢

30

C 晩成

- ① 朝夕      ② 即興      ③ 早熟      ④ 速成      ⑤ 幼稚

(類義語)

31

D 風刺

- ① 苦情      ② 皮肉      ③ 追及      ④ 評語      ⑤ 難詰

32

E 外見

- ① 形式      ② 様式      ③ 威容      ④ 体裁      ⑤ 骨格

問二 次のA～Eの故事成語の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は33～37。

33

A 石に漱<sup>く</sup>ぎ流れに枕す

- ① 負け惜しみが強いこと      ② 流されやすく意思の弱いこと

- ③ どんなに苦しくても我慢すること      ④ 頑固で融通が利かないこと  
⑤ 大変に素直なこと

34

B 臥薪嘗胆 がしんしょうたん

- ① 馬鹿にされても耐える      ② どんな場所でも寝る      ③ 目的を果たすため苦勞する  
④ 敵に復讐する ぶくしゅう      ⑤ 戦いに備える

35

C 逆鱗に触れる げきりん

- ① 目上の人に気に入られる      ② 多くの人の心を打つ      ③ 怒りで髪が逆立つ  
④ 目上の人を激怒させる      ⑤ 後輩を厳しく叱る

36

D 背水の陣

- ① 絶体絶命      ② 一所懸命      ③ 九死一生      ④ 艱難辛苦 かんなんしんく      ⑤ 千載一遇

37

E 虎に翼

- ① 危険な状態からやつとのことで逃れる      ② 次々に災難に遭う  
③ 極めて危険なことをする      ④ 権威のある者に頼って威張る  
⑤ 元々強い力をもつ者にさらに強い力が加わる

(次頁に続きます)

問三 次のコラムは、▼を付した最初と最後の段落以外は順序が正しくありません。これを読んで、後の問いに答えなさい。

▼ コーヒークップやティーカップは日常的に使っているが、チョコレートカップなる磁器があつたとは知らなかつた。江戸時代には鎖国中の日本から輸入して、欧州や中米の人々がチョコレートを飲んでいたという。どんなカップが、どう運ばれたのか。

① 長崎大教授の野上建紀さんによると、当初は中国が最大の輸出国だったが、王朝交代に伴う混乱や貿易制限策で激減。代わりに、有田焼をはじめとする上質な日本の肥前磁器が注目された。17世紀半ばには、長崎の出島から西回りでの輸出が始まったという。

② 中米での出土品などから、太平洋ルートで運ばれた肥前磁器の「主力商品」がこのカップだったこともわかつた。アジアと新大陸を結んだ海の道は、チョコレートの道でもあつた。

③ 大航海時代に中米から欧州へ持ち込まれたカカオは、まず飲み物として広まつた。水に溶かして砂糖や香辛料などを加え、よくかき混ぜる。泡と一緒に飲む際に背が高い専用の器が求められ、チョコレートカップが生まれた。

④ 野上さんは東回りの太平洋ルートもあつたのではと考えた。当時、フィリピンとメキシコをガレオン船が結んでいたからだ。20年前にマニラの遺跡で、その根拠となる有田焼の皿を初めて発見したときは「祝杯をあげた」そうだ。のちに、背の高いカップも見つかつた。

▼ 日本の職人たちは、味わつたことのない飲み物の器をつくつていた。バレンタインデーのきょう、歴史に思いをはせながらホットチョコレートを飲もうか。

(朝日新聞 2024年2月14日「チョコレートの道」、承認番号(25-1082))

※朝日新聞社に無断で転載することを禁止する)

(1) それぞれの段落を正しく並べると、順序はどうなりますか。それぞれの位置に入る最も  
適当なものを、①～④のうちから一つずつ選びなさい。(完全解答) 解答番号は、38 ～  
41。

▼最初の段落―(38)―(39)―(40)―(41)―▼最後の段落

(2) 本文中に述べられた内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。  
解答番号は、42。

- ① 江戸時代の日本ではカカオを水に溶かしたチョコレートが飲まれていた。
- ② 泡立てたチョコレートを飲むための背の高いカップが、中国で誕生した。
- ③ 太平洋ルートとは、東回りでマニラからメキシコに至るルートを言う。
- ④ 有田焼が西回り航路で輸出されたことは、マニラの遺跡の出土品が証拠となる。
- ⑤ 日本と欧州は江戸時代に東回りと西回りの航路でチョコレートを貿易していた。

以上で問題は終わります。